

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：33905

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03043

研究課題名（和文）「1960年代」の再検討：多様性と超域性の観点から

研究課題名（英文）Reexamining "The Sixties": From the Perspective of Diversity and Transnationalism

研究代表者

大八木 豪 (Oyagi, Go)

金城学院大学・文学部・講師

研究者番号：20740129

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1960年代の市民・社会運動を超域的(トランスナショナル)な手法を用い、運動間の人的・思想的交流に焦点を当てながら、1960年代の多様性を捉え文脈化する目的で行なった。その背景には、1960年代の市民・社会運動の先行研究において看過されてきたアクターの多様性、そしてその結果、無批判に「ポスト1968年」と叙述されてきた「1960年代研究」があった。そのため、本研究では、アジア系アメリカ人やインドのダリトの運動、フェミニストの運動、カリブ海の黒人の連帯と歴史的想像に着目することにより、運動を取り巻く社会的・政治的・経済的変容を捉えつつ、越境的な視点に基づいた歴史的研究を行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究が明らかにした多様な主体による国境を越えた人的・思想的交流のあり方は、社会運動の越境性に対する分析が盛んになっている1960年代研究をさらに深化させるとともに、1968年を1960年代の頂点だと見做しがちな1960年代に関する先行研究に対してその対象とする時間的な射程を伸ばすという学術的意義を持つ。また、国境を越えて、多様な人々が相互に影響を及ぼしながら社会運動を推し進めてゆく過程を明らかにした本研究は、多様性の重要性を訴える社会運動が世界各地で起きている現在の社会を理解するために必要な歴史的視点をもたらすという社会的意義も持つ。

研究成果の概要（英文）：This study was conducted to contextualize the diversity of civil and social movements in the 1960s by applying a transnational approach that focused on human and ideological exchanges among these movements. The impetus for this study was the fact that many previous studies overlooked the diversity of actors involved in such historical civil and social movements, and the uncritical use of the periodization "post-1968." To address this lacuna in the scholarship, this study applied a cross-border and cross-periodization framework to more fully explore the social, political, and economic transformations of social movements of the 1960s, specifically by focusing on the solidarity and historical imaginings of Asian Americans, the Dalit movement in India, feminist activists, and black Caribbeans.

研究分野：アメリカ史

キーワード：1960年代 超域性 社会運動

1. 研究開始当初の背景

本研究は、1960年代の市民・社会運動に関して超域的(トランスナショナル)な手法を用いて分析し、運動間の人的・思想的交流に焦点を当てながら、1960年代の多様性を捉え文脈化する目的で行った。これまでの先行研究では、主に西ヨーロッパやアメリカが研究の焦点となってきた。これまで、アメリカの反体制的運動と類似する戦略やレトリックが海外にも存在していたということに着目し、「グローバルな1960年代」、または「グローバル1968」と呼ばれる1960年代の市民運動の国際的な興隆は、アメリカの運動の後に続いたものであるという誤った結論にたどり着いた研究がなされてきた。例えば、マーク・カーランスキー(Mark Kurlansky)は、1968年にグローバルな規模で同時多発的に起こった反乱の発端は、1960年2月1日にノースカロライナ州グリーンズボロで起こった4人の黒人学生によるレストランのカウンター席での座り込みによる反対運動にあったと主張している。彼は、「1968年に入ると、同じような志をもった世界中の人々が、公民権運動を真似たいと思うようになった。1960年に座り込み運動が始まった時には、ピート・シーガー(Pete Seeger)が労働者の歌をもとに公民権運動のためのフォークソングを作った。その公民権運動を称える『ウィー・シャル・オーバーカム』という歌は日本や南アフリカ、メキシコに至る様々な場所で、英語で歌われるようになった」(Mark Kurlansky, 1968: *The Year that Rocked the World* (New York: Ballantine Books, 2004), 84)と述べている。このようなグローバル史としての1960年代の叙述は、西洋諸国における新左翼の歴史のみに基づく枠組で行われてきた。

一方、近年、1960年代を越境的に捉える試みがなされてきた。例えばマーティン・クリミケ(Martin Klimke)は、ドイツの左翼運動を越境的に捉え、アメリカとドイツの2カ国間の同盟関係に対して、これらの運動は「他の同盟関係(other alliance)」を築いたことを明らかにした。しかしこれらの先行研究では、「グローバルな1960年代」に内在した多様性と地域間の差異が見落とされた。

そのため本研究では、1960年代の市民・社会運動の先行研究において看過されてきたアクターの多様性に着目し、その結果、無批判に「ポスト1968年」と叙述されてきた「1960年代研究」を再考する目的で実施した。これらの背景から、本研究では、アジア系アメリカ人やインドのダリトの運動、フェミニストの運動、カリブ海の黒人の連帯と歴史的想像に着目することにより、運動を取り巻く社会的・政治的・経済的変容を捉えつつ、超域的な視点に基づいた歴史的研究を行った。

2. 研究の目的

本研究は、非国家アクターの超域的な活動や運動が、どのような「下からの変容」を、どのように当該コミュニティや国際社会にもたらしたのかを考察し、市民連帯の力学を解明することを目的とした。本研究では、同時期に起こった事柄を国家ごとに考察するのではなく、1960年代から1970年代にかけて構築された市民運動の超域的なネットワークや、人や思想の移動・交流を資料調査に基づいて分析し、国民国家の枠組みを超え考察した。それにより、「1960年代」の歴史的アクターと運動の多様性を明らかにしようとしたものである。また本研究は、4人の研究者による共同研究であり、アジア系アメリカ人による国境の内外を貫く運動の分析、日本とドイツにおける超域的な新左翼運動とフェミニズムの思想の繋がりの考察、1960年代から現代に至るインドのダリト運動のローカル、ナショナル、グローバルの連関についての研究、共産主義国と資本主義国の学生運動のネットワークの実態の考証というそれぞれの研究課題を設定した。その上で、1960年代(1960-1969年)という時代の境界域を越えた分析の必要性を提唱し、主流とされる限定的な歴史的アクターを基に定義されている「1960年代」を再検討することも研究の射程に収めるべく計画された。

3. 研究の方法

本研究は、1960年代の非国家アクターの活動や運動を越境的に考察するために、歴史学的方法ならびに文化人類学的方法に基づき、アメリカ合衆国やドイツ、インドなどで、アーカイブ史料や新聞・雑誌、公文書を収集・分析し、また、関係者への聞き取り調査を行うかたちで進められた。新型コロナウイルスの感染拡大状況により、とりわけ海外・国内調査の実施を中心に、研究方法についても多大なる制約を受け、代替的方法で行わざるを得なくなったが、それぞれ工夫のうえで研究の推進に努めた。

具体的には、研究代表者の大八木による、全米日系アメリカ人図書館、カリフォルニア大学バークレー校、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、ならびに、東京大学アメリカ太平洋研究資料

センターと国会図書館における史資料調査、研究分担者の幸田による、国会図書館と大原社会問題研究所における資料収集・分析、主にデータベースを用いた文献リサーチ、そして、研究分担者のシーダーによる、福岡県大牟田市における資料調査や、カリフォルニア大学バークレー校での資料収集、ドイツやオーストリア、イタリアのローマアメリカのニューヨークにおける資料調査を挙げることができる。また、研究分担者の舟橋は、史資料調査に加えて、インドのパンジャール州やカルナータカ州、ウッタル・プラデーシュ州において、当地の社会運動のリーダーや関係者からの聴き取り調査を行った。また並行して、日本在住インド人からの聴き取り調査も行ったものとなる。

4. 研究成果

本研究プロジェクトでは、上記の目的と方法に基づき、各研究メンバーがそれぞれの研究テーマと対象を追究するかたちで進められた。また折々で、対面あるいはオンライン上で研究会の場を設定して討議と見解の交換を行い、プロジェクト全体としての研究の推進を図った。研究メンバー各々の具体的な成果は、次の通りである。

大八木は、1960年代終わりから1970年代初めにかけて、ブラックパワー運動やヴェトナム反戦運動に影響を受けて、第三世界の一員として自分たちを見なし、中国系や日系といった個々のエスニシティを越えた「アジア系」というパンエスニックなアイデンティティを創り出したアジア系アメリカ人運動の参加者たちが、そのアイデンティティに基づいて、自分たちのコミュニティ内の政治と国際政治という二つの次元の政治を結びつけながら、その両方に介入していったことを明らかにした。

1960年代終わりから1970年代初めの時期に開かれた原爆の被害者を悼む催しで、アジア系アメリカ人運動の活動家は、ヒロシマ・ナガサキとヴェトナムで進行中の爆撃とを結びつけ、合衆国の外交政策と軍事行動が一貫して人種差別的で帝国主義的であり、アジア人を搾取し犠牲にしてきた証拠としてその連続性を提示した。また、アジア系アメリカ人運動の活動家は、アメリカ合衆国の外交政策とその同盟者たちを批判し、日米安全保障条約延長、沖縄返還、中華人民共和国の国連加盟といったアジア太平洋地域の国際関係における重要な問題に介入した。彼ら彼女らが、国際政治の文脈において、日本政府と台湾政府をアメリカ帝国主義の「傀儡政府」として拒否し、それぞれの政府の指導者たちを「裏切り者」として否定した時、アメリカ外交政策の支持者として、JACL や国民党のようなコミュニティの支配を長年掌握してきた組織も非難したのだった。

また、国際政治は、合衆国政府や地方政府によってもコミュニティに持ち込まれることになった。FBI 長官のフーヴァーが、中国系アメリカ人は合衆国の安全保障にとって潜在的な脅威であるとする証言を1960年代終わりに行った時、中国系アメリカ人の活動家は、それは、合衆国政府が、本人やその祖先の出身地との関係によって中国系の人々を人種化し、抑圧しようとするものだとして受け取った。そして、第二次世界大戦中に、自らの人種ゆえに合衆国政府によって強制収容された経験を持つ日系アメリカ人は、中国系アメリカ人と連帯しながら、合衆国政府の政策を批判したのだった。このように、第三世界国際主義によって国際政治とコミュニティ内の政治を結びつけながら、全てのアジア人と第三世界の人々の連帯を主張したアジア系アメリカ人運動の活動家は、アメリカの外交政策とその同盟者たちに挑戦し、ヴェトナムから、台湾海峡、沖縄、日本列島、そして合衆国内のチャイナタウン、ロサンゼルスのリトル・トウキョウ、各地のチャイナタウンに至るまで、アメリカ帝国主義と人種主義に抑圧されている「人々」、そしてそれと戦う「人々」との連帯を図ったのだった。このように、1960年代終わりから1970年代初めにかけて、アジア系アメリカ人というアイデンティティに基づく国際主義が構築されたことが明らかになった。

幸田の当初の研究計画では、共産主義圏の中の60年代の連帯の形を分析する予定であったが、コロナウイルス感染症の拡大により海外渡航が困難となったため、テーマをカリブ海領域の人種の連帯と60年代に変更し、リモートでの一次史料の調査を行った。

幸田の研究は、アメリカ史を、独立革命により生まれたアメリカ合衆国という政治的境界線の中で展開される物語ではなく、人の移動や歴史的想像、知識や文化の形成に着目し、超域的観点からその越境性や相互関係の重要性を明らかにする目的で行われた。アメリカが有する強大なパワーにも注意しながら、一国史・国家の枠組みではとらえきれない、人や思想の移動、環境の変化、経済活動などの分析を通して、アメリカの歴史的発展が有する他の地域やグローバルな歴史現象・過程との相互関連を認識し、文脈化した。また、自由の拡大を求めた運動のなかで、国境・文化横断的に形成されてきたアフリカ系アメリカ人のアイデンティティと政治思想について検討した。

具体的には、ハイチ革命、「ニュー・ニグロ」運動、そして1960年代の新しい反帝国主義運動の3つの時期に着目した。ハイチ革命と黒人共和国の成立は、黒人の解放を象徴する出来事となり、アメリカ及びカリブ海領域の黒人社会に大きな影響をもたらしたことを明らかにした。アフリカ系アメリカ人たちは、ハイチ革命は自らの歴史の一部であると想像し、アメリカ社会の中で排除されたマイノリティではなく、抑圧の経験を共有する「ブラック・アトランティック」に基づくアイデンティティを構築したことを明らかにした。このように共有された歴史的想像は、

1960年代の連帯の背景となったとも言える。さらに、帝国主義批判を展開したブラック・ナショナルリズムの思想、そしてブラック・パワー運動について、アメリカのブラック・パンサーをモデルにバミュダにおいて結成されたブラック・ベレーなどの事例を分析しながら、1960年代の越境性とその重要性を明らかにした。そして、本研究の成果を、単著『越境するアメリカ物語』（大学教育出版、2022年）において発表した。

シーダーは、1960年代の男性が中心となって展開された新左翼運動からも影響を受けた1970年代の女性解放運動が、冷戦初期の政治的背景のもと新たな「フェミニズム」の定義をどのように構築したのかを明らかにするため、1950年代から活躍した超域的（トランスナショナル）な女性の政治的な活動と1970年代の女性解放（フェミニズム・リブ）運動の関係に関する資料調査を実施した。具体的には、ロックフェラー・アーカイブ・センター（アメリカ・ニューヨーク）にて、政府機関や産業団体がどのように女性同士の交流、特に日米間の交流を企画したのかを示す資料を中心に収集した。ドイツ連邦文書館（ドイツ・ベルリン）では、冷戦中の社会主義国に近い平和派の女性団体であった「女性国際民主連盟（WIDF）」が、1950年代から世界各国の女性を集めて開催した会議に関する資料を調査した。

これらの調査の結果、第一に、女性解放運動における言語や地域を超えた情報共有を促進する国際的なイベントやネットワークの重要性が明らかとなった。また、大規模な国際的な会議や国際機関を通しての取り組みが、市民レベルのネットワークの形成に大きな影響を与えたことが明らかとなった。市民レベルのネットワークの越境的な繋がり例としては、たかぎさわこにより英語で出版された *Femintern Press*、今井泰子の1976-77年のウィーン滞在などがあげられる。第二に、ラディカルな女性解放運動の活動家たちが、国際的な大規模な集会（例えば、1975年、1985年、1995年の国連主催による会議や集会）を通して越境的な連帯関係を築いていたこと、また、その結果、グローバルな「女性解放」運動という共通の意識を有するようになったことが明らかとなった。第三に、多くの女性解放グループは、国連のような国際組織の提唱するレトリックを、それぞれの地域の文脈に位置付け、自ら設定した目標を達成するための戦略として採用することも可能であったことが分かった。本研究の成果は、2023年10月に青山学院大学のジェンダー・センター・ギャラリーにおいて発表する予定である。この発表では、特に国際的に組織された運動が、日本を含む世界においてローカルなNPO・NGOの間での情報共有を促進したことに着目する。

舟橋は、インド独立前後期に起こったダリト運動（「不可触民」解放運動）の、とりわけ1960年～70年代に興隆をみた動きに着目し、特にアメリカのブラック・パンサー党の活動から大きな影響を受けたダリト・パンサー運動に焦点を当てて研究を進めた。1972年に創始されたダリト・パンサー運動は、ブラック・パンサー党を中心とする海外における思想・動向に影響を受けたものであるが、同時に、インド国内における文脈において生じたものであり、そこにダリト運動ゆえの独自性をみることができる。とりわけ、ダリト・パンサー運動の主導者をはじめ、その後のダリト運動に多大な影響を及ぼした、B. R. アンベードカル思想と活動の影響を看過することはできない。そこで、ダリト・パンサー運動の主導者の手記をはじめとする関連資料の分析や、アンベードカルをめぐるさまざまな言説や語りの聴き取り調査を基に、1960年代から現代に至るインドのダリト運動の展開について、ローカル、ナショナル、グローバルの連関の観点から分析・考察を行ってきた。

インドでの現地調査に関しては、新型コロナウイルスの感染拡大が本格化した2020年以降は大きな制約を受け、実施不可能な時期が長く続いたが、それ以前においては、インドのパンジャブ州において、聖人などのアイコンを軸としたダリト運動に関わる現地調査を行った。またカルナータカ州では、当地の仏教運動（ダリト運動）のリーダーからの聴き取り調査を行った。新型コロナウイルスの感染状況がやや落ち着きをみた2022年には、ウッタル・プラデーシュ州において、ダリト運動の「リーダー」と政治性についての現地調査を行った。また、新型コロナ禍によりインド出張・現地調査を行うことができなかった時期においては、代替の方策として、日本在住インド人から、アンベードカル生誕祭の機会において、在日本インド大使館にて聴き取り調査を行った。

以上の調査・研究を踏まえて、より具体的には、ダリト・パンサーの中心的人物の自伝や、「ダリト・パンサー宣言」の分析・検討から、1972年のダリト・パンサーの設立には、その前代、すなわち1960年代における、ローカルならびにナショナルなレベルでのダリト・アイデンティティの興隆に加えて、アメリカにおけるブラック・パンサー党の創立と躍進といったグローバルな影響が強くあったことが改めて確認された。また、ダリト・パンサーの主導者たちに多大な影響を与えたアンベードカル アメリカ留学を行ったアンベードカルへの、当時のアメリカ社会の思想的影響もまた考慮する必要があるが にみられた、政治性と宗教性の併存と葛藤について、ダリト・パンサー運動の展開と決裂、収束への強い影響を確認するものとなった。

上記のメンバーそれぞれの研究成果を基に、プロジェクト全体を総括する研究会を2023年3月に龍谷大学にて対面で開催し、それぞれの専門分野の観点から議論を行い、本研究プロジェクトの統括を行った。上述のように、本科研プロジェクトでは「1960年代」に焦点を当てて、国民国家の枠組みを超えた、市民運動の超域的なネットワーク、ならびに、人や思想の移動・交流について、分析・考察を試みてきた。そこから浮上した課題として、こうした空間的拡がりに加えて、今後は、時間的な連なりを念頭に、1960年代以前から、以後現代にいたるまでの、さまざまなアクターの移動と交差、ならびにそこからもたらされる社会変容について、さらなる調査・研

究の深化が求められることが認識された。すなわち、横系（空間的拡がり）に加えて、縦系（時間的連なり）を織り合わせて分析・考察することにより、諸アクターの多様な活動がもたらす社会変容について、より立体的・多面的に把握することが可能となってくるものと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Chelsea Szendi Schieder	4. 巻 Vol. 13, No. 3
2. 論文標題 Reconciling Population and Social Expectations	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 East Asia Forum Quarterly	6. 最初と最後の頁 32-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Chelsea Szendi Schieder	4. 巻 Online
2. 論文標題 'That's Really Nonsense!': The Gendered Logic of Education in Postwar Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japan Forum	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/09555803.2020.1849358	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Chelsea Szendi Schieder	4. 巻 5
2. 論文標題 Still the 'Neglected Tradition'? Conflict in Contemporary Japanese History	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Verge: Studies in Global Asias	6. 最初と最後の頁 114-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5749/vergstudglobasia.5.1.0114	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Chelsea Szendi Schieder	4. 巻 15
2. 論文標題 Living for Scholarship: Fighting Slow Violence in Academia	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Gender and Sexuality	6. 最初と最後の頁 51-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Chelsea Szendi Schieder	4. 巻 6
2. 論文標題 From Coal Miner's Wife to Historical Actor: The Personal Archive of Matsuo Keiko	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 WASEDA RILAS JOURNAL	6. 最初と最後の頁 545-552
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Chelsea Szendi Schieder and Miyamoto Takashi	4. 巻 6
2. 論文標題 [Introduction] Mining Grass-Roots Archives: The Japanese Experience	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 WASEDA RILAS JOURNAL	6. 最初と最後の頁 539-544
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Naoko Koda	4. 巻 10-2
2. 論文標題 Challenging the empires from within: the transpacific anti-Vietnam War movement in Japan	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The Sixties: A Journal of History, Politics and Culture	6. 最初と最後の頁 164-182
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/17541328.2017.1390649	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Chelsea Szendi Schieder	4. 巻 10-2
2. 論文標題 Tokyo 1969: Studying Abroad, Striking Abroad	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The Sixties: A Journal of History, Politics, and Culture	6. 最初と最後の頁 150-164
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/17541328.2017.1390647	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 11件）

1. 発表者名 Kenta Funahashi
2. 発表標題 As a Chamar and/or a Buddhist: 'Caste' among 'Converted-Buddhists' in Uttar Pradesh
3. 学会等名 Indian Sociological Society (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kenta Funahashi
2. 発表標題 Trans-cultural Mobility and the Changing Notion of 'Universality': A Multidisciplinary Approach to Finding 'Universality'
3. 学会等名 AAS (Association for Asian Studies)-in-Asia 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Chelsea Szendi Schieder
2. 発表標題 戦後社会・学生運動・労働運動と知識生産のジェンダー分析 (A gendered analysis of knowledge production in postwar society, the student movement, and the labor movement)
3. 学会等名 歴史学研究会・大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Chelsea Szendi Schieder
2. 発表標題 Resilience and Reform: Adapting to a Changing World
3. 学会等名 Harvard College in Asia Program (HCAP) 2021 Conference (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Chelsea Szendi Schieder
2. 発表標題 Coed Revolution: The Female Student in the Japanese New Left
3. 学会等名 East Asia Seminar Series at the University of Cambridge (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Chelsea Szendi Schieder
2. 発表標題 From Coal-Miner's Housewife to Historical Actor: Understanding a Personal Archive as a Political Act
3. 学会等名 American Historical Association (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kenta Funahashi
2. 発表標題 Expanding Identities and Social Inclusion: A Case Study of Dalit Converts to Buddhism in North India
3. 学会等名 11th International Convention of Asia Scholars (ICAS 11) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Naoko Koda
2. 発表標題 Challenging the empires from within: the Transpacific Anti-Vietnam War movement in Japan
3. 学会等名 American Historical Association (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kenta Funahashi
2. 発表標題 A Saint of Identity and Connection: Believers of Ravidas in Uttar Pradesh, India
3. 学会等名 The Tenth International Convention of Asia Scholars (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kenta Funahashi
2. 発表標題 Assertion and Negotiation: Religious Practices of Buddhist Dalits in Uttar Pradesh
3. 学会等名 International Conference on Governance for the Margins (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Chelsea Szendi Schieder
2. 発表標題 Writing Women Back into Japan 's New Left
3. 学会等名 European Network in Universal and Global History (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Chelsea Szendi Schieder
2. 発表標題 Beyond the Barricades: The Possibilities and Pitfalls of the Campus-Based New Left in Japan
3. 学会等名 American Historical Association (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計11件

1. 著者名 Chelsea Szendi Schieder	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Duke University Press	5. 総ページ数 224
3. 書名 Coed Revolution: The Female Student in the Japanese New Left	

1. 著者名 舟橋健太、大村一真、川村寛文、関口寛、寺戸淳子、山本昭宏、平野克弥	4. 発行年 2021年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 324
3. 書名 差別の構造と国民国家 宗教と公共性	

1. 著者名 佐藤史郎、石坂晋哉、舟橋健太	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 512
3. 書名 現代アジアをつかむ	

1. 著者名 Chelsea Szendi Schieder	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Duke University Press	5. 総ページ数 212
3. 書名 Coed Revolution: The Female Student in the Japanese New Left.	

1. 著者名 Naoko Koda	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Lexington Books	5. 総ページ数 274
3. 書名 The United States and the Japanese Student Movement, 1948-1973: Managing a Free World	

1. 著者名 石坂晋哉、宇根義己、舟橋健太、小嶋常喜、井田克征、井上春緒、小松久恵、上田知亮、板倉和裕、和田一哉、古田学、福味敦、中條暁仁、松尾瑞穂、竹村嘉晃、茶谷智之、中村沙絵、山本達也、飯田玲子、橘健一、木村真希子、志賀美和子、須永恵美子、鈴木真弥	4. 発行年 2020年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 304
3. 書名 ようこそ南アジア世界へ	

1. 著者名 田中雅一、松尾瑞穂、南出和余、中村沙絵、安念真衣子、サイド・フォージア、須永恵美子、山崎浩平、舟橋健太、中屋敷千尋、石井美保、金谷美和、宮本万里、橘健一、岩谷彩子、外川昌彦、藤倉達郎、菊池真理、木村真希子、山本達也、飯田玲子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 456
3. 書名 インド・剥き出しの世界	

1. 著者名 舟橋健太、石森大知、岡部真由美、藏本龍介、倉田誠、丹羽典生、小河久志、白波瀬達也、奈良雅史、小西賢吾、田中鉄也	4. 発行年 2019年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 448
3. 書名 宗教と開発の人類学 グローバル化するポスト世俗主義と開発言説	

1. 著者名 Tatsuya Yamamoto, Kazuhiro Itakura, Tomoaki Ueda, Kenta Funahashi, Shinya Ishizaka, Makiko Kimura, Maya Suzuki, Kodai Konishi	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 235
3. 書名 Law and Democracy in Contemporary India: Constitution, Contact Zone, and Performing Rights	

1. 著者名 Kenta Funahashi, Akio Tanabe, Ayako Iwatani, Kazuya Nakamizo, Anderson H. M. Jeremiah, Abhijit Dasgupta, Rita Banerjee, Makiko Kimura, Michael Heneise, Arko Longkumer	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 186
3. 書名 Rethinking Social Exclusion in India	

1. 著者名 Chelsea Szendi Schieder, Tamara Chaplin, Jadwiga E. Pieper Mooney, Burleigh Hendrickson, Nick Rutter, Milinda Banerjee, Steffen Bruendel, Patrick Iber, Todd Shepard, Alejandro Gomez-del-Moral, Jing Jing Chang, Gabriela Aceves Sepulveda, Karen L. Ishizuka, Jerome Bourdon, Maha Nassar, Marvin Menniken	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 302
3. 書名 The Global Sixties: Conventions, Contests, and Countercultures	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	幸田 直子 (Naoko Koda) (30781091)	近畿大学・国際学部・准教授 (34419)	
研究分担者	Schieder Chelsea (Schieder Chelsea) (80792978)	青山学院大学・経済学部・教授 (32601)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	舟橋 健太 (Funahashi Kenta) (90510488)	龍谷大学・社会学部・准教授 (34316)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関